

成年後見制度から学ぶ、これからの地域福祉

活動先：NPO 法人 知多地域成年後見センター

1. 活動内容

「成年後見」という言葉すら知らなかった私は、未知の世界であった知多地域成年後見センターを第一志望で届けた。無知だった私は現在他人に説明できるまで学習した。事前学習で成年後見制度の書籍を読み漁った。高齢者福祉論の講義で1時間使って説明して下さった先生に、更に突っ込んだ質問を浴びせ困らせた。

事前学習で勉強できたものとタカをくくっていたが、現場に行ってみると甘かったことを思い知らされた。現場では常に大勢の利用者を支えるために動き、成年後見の基礎知識だけでは通用しなかった。知多地域成年後見センターで発行している書類に目を通し、分からないところを職員さんに聞いたりした。活動先ではセンター職員の方から依頼を受けた紙芝居・模造紙を作成した。これは高齢者や一般市民に向けて、成年後見を知ってもらうきっかけになればという思いで作成した。又、センターの業務としての民生委員への講演会に同行させていただいた。成年後見以外にもNPOの仕事として愛フェス知多地域ブロックでボランティアとして運営に携わり、映画「降りてゆく生き方」を鑑賞し、成年後見以外にも貴重な勉強をさせていただいた。活動後の学習で成年後見の知識を身につけることで自分たちに何ができるかが課題になった。3人で討論することで、意見をぶつけ、共に学びあうという勉強をした。

事後学習では仲間とともに活動を振り返り、もう少し業務に同行させていただきたかったなどの反省もあったが、私達の活動が紙芝居という形になって残ったことが嬉しかった。目に見えて残るということは成年後見に携わっていた証になると思った。

2. 活動を振り返って

前にも述べたが、私達は成年後見について学ぶところから始めた。無知であったからこそ吸収できたこともあり、今回の紙芝居制作につながったと思う。高齢者でも分かる紙芝居を作るということは、まず自分たちが成年後見について理解していないと作成できないものであり、誰でも分かる表現や言い回しなどを考えなければならなかった。これはひとりだけの考えではできず、グループみんなで話し合うことで解決していった。今でこそ仲間とともに笑いあって話しているが、新学期始まった当時の私達の仲は最悪であった。私のきつい性格が、理解のできない仲間に対してイライラしてしまったりした。だが、時間をかけて話し合うことで、一步一步解決していった。今は笑いあえるほど仲の良い仲間を得られた。一緒に苦楽を共にした仲間はそういない。

成年後見はまだまだ一般市民に定着している言葉ではない。しかし誰かが知っていてふとしたときに思い出せば誰かが助かる。知多地域成年後見センターでは日々の多忙な業務をこなしつつ、啓発運動を定期的に様々な形で行っていた。今回学んだことを身近なとこ

ろから広めていくのが私達にできることだと考える。

私達が今回の活動で身に付けたことは成年後見に関わる知識である。この知識は将来的に目標とする社会福祉士の資格取得に直結する。またワーカーとしての仕事を希望している私には、実現したら決して無駄な知識にはならないと思う。知多地域成年後見センターの職員は社会福祉士を必ず持たねば仕事ができないというわけではないが、社会福祉士の仕事のひとつを担っていると感じる。私が身に付けた知識を、これからの専門演習での学習や就職してからの現場で広めて実行していくことが大切だと考える。

3. これからの社会に対して

私達が学んできた成年後見制度はこれからの時代に必ず必要となってくる分野だと思う。成年後見は障害者や高齢者が対象であり、国から出ているデータにあるが、障害者では自閉症、高齢者では認知症といった人が確実に増えている。大切なのはそういった人々に対して、成年後見制度が知られていくことだと思う。現在の社会は本当に制度の利用が必要な人に認知されていない、自己責任の世の中である。しかしその状態になるのは本人だけの責任では決してないはずだ。弱者と呼ばれてしまう人たちに対して地道に啓発していくことが大切なんだというセンターの方の言葉が強く心に残っている。

活動で映画「降りてゆく生き方」を見せていただいたが、私達は決して自分の欲のためだけに生きているのではない。大切なのは自分だけでなく、他人を思いやる気持ちだと思う。今回サービスマーケティングの活動に協力して下さったNPOはどれもお金を儲けるためだけで活動をしてはいない。原点である困った人々を助けたい、目の前の人を助けたいという純粋な助け合いの気持ちが大勢の人によって大きく成長していったのだと思う。社会のセーフティネットがこれからも広がってほしいと思う。そして私も引き続き関わっていききたい。